

# 矢作川中流部での子どもの川遊びについて

About children's river play in the middle reach of the Yahagi River

吉橋久美子

Kumiko YOSHIHASHI

## 要 約

矢作川流域では、かつては密接に結びついていた川と住民との間に距離が生まれる「川ばなれ」が言われて久しい。現在では川に「近づいたこと」さえない住民も多数いる。他方、矢作川の川辺の保全活動をしている住民もいる。その住民たちへの聴き取りにおいて頻繁に現れるのが昔の川遊びの思い出（その時の風景）であり、それらは活動の原動力の一つとなっている。

本稿では、川遊びを川と人を結ぶものとして捉えて、川遊びに関する聴き取り、市民アンケート、川遊びの観察から、子どもと川の間で「川ばなれ」がどのように起こったのかを記述し、「川ばなれ」の解消に向けて何をすればいいかを考察する。

1960年代から1970年代にかけて矢作川では水質汚濁により川遊びが禁じられ、ダムの建造等により川の姿も変わることで、子どもと川の関係性、川での異年齢集団の交流、生き物との付き合いが失われた。それに対して1970年代後半からは川を復活させる運動がおこり、「子どもの川遊びの復興」が目標の一つとされた。調査からは川遊びが川と人をつなぐ重要な役割を担っていたこと、また川遊びをさせたい大人、川遊びをしたい子どもは多いにもかかわらず、川の危険性への恐れや川の情報の少なさ、アクセスのしにくさが川遊びの阻害要因となっていることがわかった。

今後、市民が川との豊かなつながりがある生活を送るための方法の一つとして、川遊びができるような「遊べる川」づくり、遊べる川の情報共有、危険回避法も含めた体験の場づくりなどを通して「川遊びをする人間関係」を育むこと、川辺の愛護団体と川遊びをしたい人々のネットワークづくりなどを行うことが、有効な実践となるだろう。

キーワード：川遊び、川ばなれ、川辺の保全活動

## 1. はじめに一川遊びという体験

IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）は子どもの遊びを「栄養や健康や住まいや教育などが子どもの生活に欠かせないものであるのと同じように、子どもが生まれながらに持っている能力を伸ばすのに欠かせないもの」「子どもが生きていくために必要なさまざまな能力を身に着けるために不可欠なもの」と表現している<sup>1)</sup>。

では川遊びはどのような意味を持つだろうか。子どもの遊び空間について研究した建築家の仙田満は遊びの原風景の一つとして小川をあげている（仙田、1992）。「たくさんの思い出が小川にある。それは小さな昆虫であったり、メダカやフナのような小さな魚であったりする。」「石の感触、泥の感触、深みのスリル、流れの変化、小さな滝のおもしろさ、そういうものが身体全体にあそびの強烈な思い出として残されている」。また、仙田は「遊びの6つの原空間」の第一の空間を「自然スペース」としてその空間の中で「子どもたちは命の重さを学んだよ

うに思う<sup>2)</sup>とする。

1998年に出された国の河川審議会「川に学ぶ」小委員会の報告『「川に学ぶ」社会をめざして』では、川遊びの場が「人格の基礎を培う原体験の場」であったとし「生命の尊さ、自然の法則や仕組みを理解することができた」とした。

川遊びはこのように「身体全体に」「強烈な思い出」として残されるようなもの、「命の重さ」を学べるようなものだという。そしてなにより、何十年経っても「楽しかったなあ」という言葉が口を突いて出るような体験が川遊びなのである。

## 2. 矢作川における川遊びの「力」

矢作川では川遊びはどのような役割を果たしてきたのだろうか。

2017年7月、豊田市立西広瀬小学校で、同校児童および地域住民による矢作川の水質調査が15,000日を達

成したことを記念する式典が行われた。

矢作川では1960年代、窯業用の粘土の採掘や山砂利の採取によって川の汚濁が進んでいた。西広瀬小学校では1968年には矢作川での水泳が禁止になり、「よい子はここであそばない」という看板があちこちに立ち、支流の飯野川も入ることが禁止された。しかし、子ども達の川へ入りたいという思いは募り、水質の継続調査が始まるきっかけとなった（豊田市立西広瀬小学校記念誌発行実行委員会，2017）。1976年7月から続くこの調査の原動力は「川で遊びたい」というものだった<sup>3)</sup>。

また、川辺の維持管理を行うボランティア組織「水辺愛護会」<sup>4)</sup>の会員に聴き取りをすると、川遊びの話が出る。60年、70年前に川で遊んだ楽しさを今も覚えており、様変わりしてしまった川の風景から、かつて遊んだ川の「昔の姿を掘り出」<sup>5)</sup>す感覚で活動に取り組んできたことなどが述べられる。ここでも川遊びの経験が活動の原動力の一つと言えるだろう。川遊びは川との豊かな市民生活を取り戻すためのキーワードとなるようだ。

矢作川と人の関わりを辿った論考では「女性」「暮らし」を切り口とするなかで子どもと川との関わりが触れられている（小川，2003）。矢作川と流域の人々とのつながりを様々な角度から記述した矢作川漁業協同組合の100年史のなかでも、川遊びのことが聴き取りを元に生き生きと表現されている（矢作川漁協100年史編集委員会，2003）。また、澄んだ川を取り戻すための市民活動のなかで「水泳大会」が開催されてきた（古川，2005）。これら論考や聴き取り、豊田市民へのアンケート結果、子どもの川遊びの観察を通して、矢作川中流域の子どもの川遊びの変化とその要因を概観し、川遊びの復活に向けて何をすればよいか考察した。

本報告の「3. 矢作川中流部の川遊びのこれまで」は、長野県の大川入山に源を発する、河川延長118 km、流域面積1,830 km<sup>2</sup>の一級河川、矢作川の中流域（愛知県豊田市域）を調査地とした。「4. 矢作川流域（豊田市域）の川遊びの現在」は、豊田市民へのアンケート、矢作川水系巴川の支流である仁王川での川遊び観察の結果を述べる。

### 3. 矢作川中流部の川遊びのこれまで

#### 3-1. 子どもたちが澄んだ矢作川で川遊びをしていた時代（～1960年代）

「夏は川、冬はお宮さんの木のぼり。それが子どもの“仕事”だ。」<sup>6)</sup>

矢作川が澄み、子どもたちが群れて遊ぶ川だった頃のことを80歳（以下、年齢は当時）のM・T氏が振り返って出てくるのが冒頭の言葉だ。川が汚れてしまう高度経済成長期に入る前の、矢作川での遊びの様子をいくつか紹介したい。

矢作川中流部に位置する市内扶桑町の古巣水辺公園（河口から約44 km）で行われたイベント「第11回矢作川『川会議』」の参加型ディスカッションでは次のようなエピソードが語られた（豊田市矢作川研究所，2012）。

N氏：私、上流のほうの百月ダム（河口から約65 km）があるところですが、小学校、中学校時分は、遊ぶところといえば川しかなかったわけです。夏は水が出ると川へ行って遊ぶ。親が夏は昼寝をしないといけないので、「うるさいから川へ行け、川へ行け」と（1950年頃のこと）。

この百月ダム近くについては筆者が2016年に行った聴き取りでもこのようなやりとりがあった。

N・K氏：昔は水泳、魚掴み。ほんとに水がきれいでしたね。水中眼鏡をつけて泳ぐと水族館みたいだったね。とおくまで魚が見えた。

N・E氏：タモだとかヤスとか使って。アユでもひっかけるぐらいおっただ。昔は川行くのに水なんて持ってかん。川の水を飲んどった。はっはっは…。

N・K氏：ウナギなんかもよく釣ってた。

N・E氏：ハエ（オイカワ）とかイシャンコ（ヨシノボリ）をつけた針を棲みかに入れりゃあ釣れた。

N・K氏：いっぱいとれましたもんね。そういうのが今できんね。餌の確保が難しい。

川でとれた魚はほとんど食べられる。川遊びは食と繋がっていた。

上記の「川会議」のディスカッションでは、古巣水辺公園の対岸、平戸橋町に在住の90歳のY氏も語った。以下がY氏が10歳の頃の話だとすると1932年ごろのことになる。

Y氏：学校から帰ってくると、まずかばんを放っておいて、あそこの岩から飛び込んで、この辺を泳いでいくのですが、この辺はもっと大きな岩が出ていたんです。その岩に波が立っているんですが、その波に乗って、その岩の上を、腹をつるつと滑らせて流れていくのが非常におもしろかった。」（豊田市矢作川研究所，2012）

古峯水辺公園がある扶桑町の下流、百々町<sup>7)</sup>で1955年に撮影された写真<sup>7)</sup>には、岩場の手前で6人ほどの子どもたちが泳いでいる。2016年にこの場所で行った聴き取りでも、かつての川遊びの様子が<sup>8)</sup>生き生きと語られた。「岩落とし」といって、岩に立っている人間を落とす遊び。「岩くぐり」は潜って別の場所から出てくること。岩の傍にできる“ざり”（渦）でぐるぐる回っていたこと。足が着く程度の深さであって、危険ではなかったそうだ。対岸へ渡って岸を上流側へと歩き、また泳いで戻ったこと。遊ぶのは午後1時から4時まで。大人が見守りをしていた。しかし、1960年前後に上流から「白い水」が流れてきて川遊びが禁止になってしまったという。

以上のように、かつて矢作川はそのまま水を飲めるほどのきれいで、川辺には子どもたちの姿があり子どもたちは全身で川と付き合っていた。「腹をつるつと滑らせていく」身体感覚を、80年ほど経っても覚えているのである。そして川遊びは、一部で大人の見守りもあったが、先輩から後輩へと伝えられるものであり、子ども集団のものだった。

### 3-2. 川遊びが禁じられる「川ばなれ」の時代へ（1960年代後半～）

川は時に人命や財産を奪う恐ろしい存在でもある。人々の記憶に1959年の伊勢湾台風の大変な被害が刻まれた後、1960年代の高度経済成長期は、子どもを川から遠ざけるいくつもの要素が重なった。

まず、矢作川の水質が悪化し濁った。その背景と、その後水質を良好に保つまでの農業者・漁業者の闘いについては芝村の論考（2003）に詳しいが、上流部での窯業原料の採掘や山砂利の採取時の排水、工場排水等により川の汚濁が進んでいたのだ。地元の人が「ヨナナ災害」と呼ぶ1972（昭和47）年7月の豪雨災害も、川の濁りにつながった。旧小原村・旧藤岡町（現豊田市）を中心に川の氾濫、土石流などを引き起こし、死者64名行方不明者4名の犠牲者をだした激甚災害であったが、この災害復旧工事の排水が川に流れ、さらに、それに「便乗」して不法に排水を流す業者もいた。「（昭和）48年4月ごろより下流ノリ業者、漁業協同組合等から、これら原因に対する不満の声が表面化した」という（愛知県土木部、1975）。

そして子ども達は川で遊ぶことが禁じられた。先述の百々町の聴き取りでは1960年ごろに禁じられ、少し上流の平戸橋近辺の住民によれば1970年代に入っても禁じられていた。子どもが水難事故にあう可能性があるか

らという理由もあった。また、豊田市では1956年に上水道の給水が始まり（豊田市、2011）、小中学校のプールは1962年の小清水小学校を皮切りに1967年ごろまでには中学校ではほぼ設置が完了し、1975年時点では全中学校、四分の三の小学校に設置されていた（町村合併前の市内）（豊田市、1977）。

川の形も変わっていった。矢作川中流部の河川敷にはかつて白い砂浜があり、幼い子どもも遊びやすい環境だった。出水後は上流から大量の砂が運ばれ、まるで「砂漠のよう」になっていたという<sup>9)</sup>。小川による古峯地区での調査（2003）でも、「現在の水際から5～6メートルほど内側まで流れがある浅瀬で、小学校低学年くらいまでの小さな子どもを安心して遊ばせることができた」とある。

しかし、「ダムができて砂がないもんで砂浜がなくなっちゃったね。ついでにヨシとか生えて。昔と川の様子が変わってきた」<sup>10)</sup>と住民はいう。川砂利の採取もあり、土砂の需給バランスが変化して河床が低下、用水の取水困難や河川管理施設や河川工作物に影響が現れ始めるほどになる。川砂利の採取は昭和の終わり、1988年度まで続いた<sup>11)</sup>。

この河床低下と関連して、河床が「二極化」してきた。これは、水際が崖のようになり、河道がU型水路のような形状になる現象であり、これによってそれまでたびたびの氾濫でかく乱されて河畔独特の植生が保たれていたものが、かく乱の頻度が減り、木本主体に変わる「樹林化」も進行している（豊田市、2016）。

また、1972年の豪雨災害後にコンクリート護岸化が進んだ川も多い。以下は旧小原村の田代川についての聴き取りである。

U・A氏：釣竿なんてあらへんくて、川の中入って横にある穴探すんだね。その中に手を突っ込んでアカモト（筆者注：カワムツ）だとかオイカワだとかそういうの手掴みにするんだわ。オイカワはうまいよ、骨が柔らかいから<sup>12)</sup>。

川がコンクリートで護岸化されれば「横にある穴」はなくなり、この遊び方が出来なくなる。生き物が生息する場であることが遊び場としての川の大きな魅力だが、それが失われる。ほ場整備も川の変化に関係する。旧小原村に隣接している旧旭町築羽自治区の場合は1978年から愛知県のほ場整備がはじまり、多くの流路が「コンクリート張り」に改変された（長澤、2015）。

人々の川辺への関わりも変わっていった。護岸のため

植えられていた竹は、かつては日用品や建材、樽のたがや海苔粗朶等に使うために適度に伐られていたが、産業や生活様式の変化により竹が使われなくなって放置され、密生して川へのアクセスを遮ることになる。

また、子どもを取り巻く社会状況も変わってきた。豊田市史(1977)によると、「交通事故の心配や土地の経済性の高まりから野外の遊び場を奪われ、河川の汚染で遊泳が禁止され、また野外遊びの時間を失ったことなど」によって、豊田市の子どもの遊びは、昭和30年代と昭和40年代を比較して、「全身運動から手先の遊びへ」「年齢を異にしたものの集団的な遊びから個人や同年齢者の相対遊びへ」「自然の中の遊びから施設の中の遊びへ」などの変化が起き、「現代っ子」は「体力に欠け、物を作る喜びと忍耐力・冒険心を失ったかに見える」とある。

以上のように、川の状況、社会の状況が子どもたちを川から遠ざけることとなり、川遊びという、全身を使う遊びが奪われた。川にすむ生き物との付き合いも失われた。川遊びにつきものだった異年齢の遊び集団という子ども社会も、大人の見守りも、川では失われたことになる。

### 3-3. 川遊びが川と人をつなぐという期待を担った時代(1970年代～)

矢作川の水質悪化に対しては、1969年、6農業団体、7漁業団体、5市町により「矢作川沿岸水質保全対策協議会」が発足して、濁水の発生減への抗議等を行い、民間と行政との連携による“流域管理の社会的システム”(内藤、1987)「矢作川方式」を確立していく<sup>13)</sup>。1976年には先述の西広瀬小の水質汚濁調査がはじまる。

さまざまな人々が再び川に「近づこう」と川の復活に向けて動き始めるなか、川遊びは人々の意識を川に向かわせ、川と人をつないでいこうという期待を担うことになる。流域環境に関心を持つ同人によって発行された『月刊矢作川』と矢作川漁業協同組合、「矢作川学校」の動きを辿りたい。

#### ① 『月刊矢作川』

同人誌『月刊矢作川』は1977年に「①流域の生活と文化の歴史を発掘し紹介する②流域の自然を守る③矢作川水系の諸河川にかつての清流を取り戻す④川を汚さず自然を破壊しない生活の在り方を考える」(月刊矢作川同人、1977a)を目標として創刊され、1985年まで100号発行された。同誌の発行過程は社会的な運動であるともいえ、古川(2005)によれば「矢作川河川保全運動の

特徴である流域巻き込み型、行政巻き込み型、諸団体巻き込み型の運動がこの中流部都市住民の運動によって確立されていった」のである。

同人は発刊初年度の1977年から1984年まで、毎年8月に「泳げる川を返せ」水泳大会を実施した。第4号の巻頭には、「矢作川水泳大会の提唱」と題した一文が掲載され、矢作ダムを建造した中部電力も、漁協も、清流回復のために公害防止に動き出しているとしたうえで、以下の不安と主張が綴られている。

しかし私たちの不安は大きい。川の運命は今も、中電と漁協の動向に左右されており、中電が目指す「清流」とは「魚が棲める程度」なのだ。私たちは、清流回復の目標を「魚の棲める程度の川」から「泳ぎたくなる川」(下線筆者。以下同じ)へ高めるよう主張したい。川が万人のものであった時代の清流を取り返すには、万人が川と共に生きる生活に帰らなければならない。(月刊矢作川同人、1977b)。

当時、川の汚濁はひどく、「この川に清流を回復することができるのか」と絶望的な気分になることが多いという状況だった。『泳げる川をかえせ第一回矢作川水泳大会』は、まだ“泳げない川で泳ぐ大会”の段階ではありますが、回を重ねることが、この川に清流を取り戻す道に通じるものと信じています。(月刊矢作川同人、1977c)とある。

会場は市内西広瀬町の矢作川とその支流の飯野川で、第一回は約200人の大人や子どもが「十数年ぶり」に矢作川の水泳を楽しんだ(月刊矢作川同人、1977d)。参加者は回を追うごとに増え、第二回と第三回が約250人ずつ(月刊矢作川同人、1980)、第四回は300人、第五回は350人が参加した。記事には「参加者が増えていることを考えるなら、相変わらず流れ続ける濁水にもかかわらず、水泳大会を今後とも続ける意義はますます高まっていると言わなければならないだろう」(月刊矢作川同人、1981)とある。翌年は雨天中止、第七回は179人が参加した。この年の記事は子どもの身体の変化についても触れている。「この頃、子供たちが海や池や川で泳げなくなった、プールでさえ足のとどかないところでは泳げない、そんなことをよく耳にします。子どもたちが危険な所を察知したり、そこから身を守るための勘や行動力において、能力低下をきたしているようです。」「泳げる川を、本当に泳ぎたくなるような川を取り戻そう、そして自然のなかで身の危険をかわしながら伸び伸びと遊べる子供たちを育てたい、というのがぼくたちの目論みである。」(月刊矢作川同人、1983)。水泳大会には延

べ1,500人を超える人々が参加した。

同人は最終の第100号の座談会でこのようにふりかえっている。「しかし、見た目だけかもしれないが、今年の矢作川は本当にきれいだねえ。この雑誌でやってきた水泳大会が恋しくて、今年も子どもを連れて広瀬で泳いできたが、例年になくきれいだった」。しかし、その話を聞いた別の同人は「確かに今年の矢作川はきれいだ。しかし、昔に比べると川底の石の輝きが違うねえ。昔の石はキラキラと光っていたよ。今の石は、今年でも、泥が乗っている感じで黒ずんで見えるね。」(月刊矢作川同人, 1985)とかえす。川の問題は解決したわけではなかった。

## ② 矢作川漁業協同組合

一方、矢作川漁業協同組合の動きは以下のようなものである。2001年、豊田市長と矢作川漁業協同組合長の間で矢作川流域の「川のある市民生活」「子供の川遊び」「川の経済」などを回復しようという7か条の覚書素案が作成された。

2003年2月には矢作川漁協は100周年を記念して「環境漁協宣言」を決議した(矢作川漁協100年史編集委員会, 2003)。この宣言にも「7. 矢作川漁協の上流, 中流, 下流の各ブロック組織ごとに矢作川学校を創設し, 各ブロックが自主計画にもとづき, 河川環境改善, 漁業振興, 漁業後継者育成, 川の伝統行事や子供の川遊びの復興に取り組み, 地域社会の経済的, 文化的発展にも寄与します。」と、やはり子どもの川遊びが盛り込まれているのである。

## ③ 矢作川学校

2001年5月, 矢作川漁業協同組合と複数の水辺愛護会, 豊田市などで構成される「矢作川『川会議』実行委員会」が第一回「矢作川『川会議』」を開き, 「矢作川『川宣言』」が採択される。

この宣言には, 毎年5月第2土曜を「矢作川の日」とし, 『矢作川の日』は子どもたちを川に呼び戻す日でもあります。小川や支流での川遊び, 本流での魚釣りの復活に勤め, そのために環境整備も提案します。』とある。また, 「矢作川の河川環境や川の文化を守り, 継承する人材を育成し, さらに内水面漁業の未来の担い手でもある少年釣り師たちも育てる川の学校」の計画が述べられる。

この川の学校計画は翌2002年, 「矢作川学校」(事務局: 豊田市矢作川研究所) という講師派遣の仕組みとして実現し, 以来2017年現在まで中高校や子ども会等が開催する総合学習・環境学習への講師派遣を続けている。

2002年度は30回(参加者数不明), 2003年度~2016年度までに延べ473回, 20,759人が参加している(2016年度は上半期休校)(座学や森林等についての学びも含む)。

このように, 子どもの川遊びの復活は, きれいな川を取り戻すための一つの道とされた。

現在, 矢作川中流部は本流では川遊びは難しく, 支流等での川遊び(生き物調査を含む)を, 上記の矢作川学校や市の社会教育施設である交流館や子ども支援団体, 市民団体等が行っている。

また, 豊田市としては太田川等<sup>だいた</sup>で多自然型川づくりを行い, 2015年度からはコミュニティづくりも視野に入れた, 住民主体の「ふるさとの川づくり事業」で住民主体の, 川遊びができる自然豊かな川づくりを目指している(矢作川支流の岩本川)。

なお, この時代の矢作川と人に関わる動きとしては1991年, 豊田市扶桑町で, 矢作川に近自然工法による水制工が作られた。この地は古巣水辺公園と名付けられ, 維持管理するために地元団体, 「古巣水辺公園愛護会」が1993年に発足し, 密生していた竹を伐り, 草を刈る活動を始めた。1994年, 「豊田市矢作川研究所」が第三セクター(矢作川漁業協同組合, 枝下用土地改良区, 豊田市)として設立され, 「矢作川学校」の事務局を務めることになった(2003年から豊田市営)。

国レベルでは1997年の河川法改正で, 治水・利水だけだった法の目的に「環境」が加わり, 河川審議会により「川に学ぶ」社会を構築することが必要であるという答申がなされた。それを受けて, 文部省, 建設省, 環境庁(当時)が連携し1999年から『「子どもの水辺」再発見プロジェクト』を開始した。川が子どもの遊ぶ場所としてお墨付きを得たと言えるだろう。

## 4. 矢作川流域(豊田市域)の川遊びの現在

現代の豊田市民は川遊びにどのような意識を持っているのか, 市民アンケートと聞き取りから見えていくこととする。また, 現代の子どもたちは川でどのように遊んでいるかを調べた結果を示す。

### 4-1. 川遊びに対する豊田市民の意識

#### 4-1-1. 「E モニター制度」による「川の自然環境に関するアンケート」より

豊田市では事前登録をした市民, 「E モニター」にインターネットや電子メールを利用して行政に関連するア

ンケートを行う制度がある。豊田市矢作川研究所ではこの制度を利用して「川の自然環境に関するアンケート」を行った（2015年9月4日～9月13日）。

回答者数：198人（Eモニターの86%）。198人中男性79人（40%）、女性119人（60%）。年代別では20代5%、30代31%、40代34%、50代16%、60代12%、70代及び80代2%。

アンケート項目のうち、川遊びに関連するものを取りあげて述べていきたい。自由記述はコーディングしたうえで集計した。

・設問「市内にある川に行ったことはありますか」

市内の川に行ったことがある人は約7割の141人、約3割（57人）は行ったことがなかった。

・「川に行った目的は何ですか」（複数回答可）（図1）

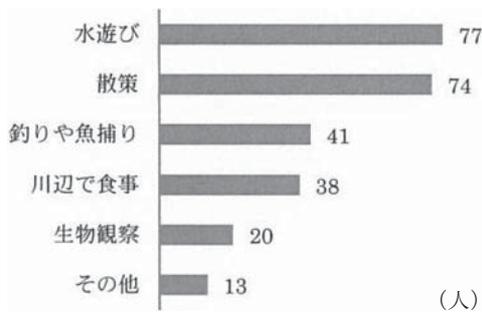


図1 川に行った目的。

川へ行った目的は「水遊び」が最も多く、回答者の半数を超える77人（55%）が該当している。

・「川に行ったことがない理由を教えてください」（自由記述）。

一方、川に行ったことがない（57人）理由は61件記述された。「行く用事がない・目的がない」が最も多く、24件を占めた（回答者人数比42%）。次に「興味がない」が10件（18%）、「汚い」が6件（11%）、「危険」5件と「近づける場所がない」「川のことがわからない」が

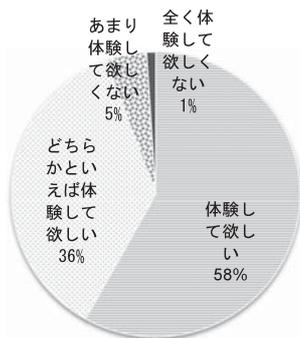


図2 安心して近づける川辺があれば、子どもが川遊びを体験してほしいか。

3件ずつ、他に「子どもが小さい」などがあった。

・「市内に安心して近づける川辺があれば、家族や地域の子どもの川遊びを体験してほしいですか」

「体験してほしい」、「どちらかといえば体験してほしい」をあわせると94%が「体験してほしい」と考えている。

・『「体験してほしい／体験してほしくない」を選択した具体的な理由があれば、お聞かせください』

〈「体験してほしい」理由（自由記述）〉

109件の理由が挙げられた。「自然と触れ合わせたい、生物を知ってほしい」などが55件、次いで「川の楽しさと危険を体験してほしい」が16件と多かった。「小さい時の多様な経験が重要」が13件、「自分が体験して楽しかったので子どもにも体験させたい」も10件あった。

〈「体験してほしくない」理由〉

8件中6件が「危険」、2件が「綺麗ではない」という理由だった。

以上のように本アンケートでは、川へ行った目的として「水遊び」と答えた人が多くいた。また「安心して近づける川辺」があれば子どもを川で遊ばせたい人がほとんどだった。しかし、川での用の無さ、危険性、近寄りたさなどが妨げとなっていることがわかった。

#### 4-1-2. 聞き取りにおいて見えた市民意識

子どもと川遊びの関係について、小学生までの子どもを持つ母親に尋ねた。

「もう子どもって水があるだけで大喜びで、一略一、なんか、川とかも、川も森もやっぱり、同じだと思うんですけどー、なんか、自然てすごい懐が深くてー、こう〈笑〉、こんなふうに、（子どもたちと大学生がザリガニを捕まえている）捕まえて、捕っちゃってワーってこう、生き物をおもちゃにしてポイでも、怒らないんですよー。」<sup>14)</sup>

「子ども……が外で遊ぶ姿、一略一、すごくほのぼのしてて、こう、幸せをもらおうというか、んー、みんな、親としての喜びと（笑）感じられるなあと。」<sup>15)</sup>

川では子どもは水があるだけで喜ぶこと、生き物に触れ、自然の懐の広さを感じられること、子どもが自然のなかで遊ぶ姿に親としての喜びを感じられる、という。

しかし一方で、川遊びをさせたいができないという声もある。

「ほんとは、（川遊び好きで近所で知られる）〇〇くんみたいに遊ばせてあげたいんだけど、やっぱり何かあるかわかんないと思うと、ちょっと安心して遊ばせに行かせられないから、結局一、（んー）、遊びに行く機会を奪っ

てしまっているというか……」<sup>16)</sup>。

また、母親の立場からすると、「お父さんを巻き込みたい」という。父親が乗ると家族でスムーズに動けるが、父親はなかなか動かない。なにか仕掛けが必要で父親同士誘いあったり、「肩書がある人」の講座に参加する形にしたり、現地で「手持無沙汰にならないよう」に役割があるといいという<sup>17)</sup>。

アンケートと同様に、川遊びをさせたいがさせられないジレンマを持つ親がいる事が分かる。

#### 4-2. 現代の子どもは川でどう遊んでいるか

子どもたちは川へ行くチャンスさえあれば川遊びを楽しんでいる。

まず、アンケートや聞き取りのなかで人気があった王滝溪谷（矢作川水系巴川支流の仁王川）での夏に観察された子どもの川遊びの様子を記しておきたい<sup>18)</sup>。

装備としては、基本的に子どもたちは水着を着ている。それ以外はまちまちであるが水泳帽をかぶり、日焼け防止のための長袖のラッシュガードを着て、水難防止のための両腕に嵌める小さな浮き輪やライフジャケットをつけている子もいる。持ち物はタモと浮き輪とバケツまたは小さなプラスチックの水槽。大きな水鉄砲やビーチボールを持っている子どももいる。

川では何をしているだろうか（表1）（図3）。小さい子は小さいなりに川を歩くのを楽しみ、川に浸かって水をさわり、大きい子は岩から深みに飛び降りる。友達と魚をとり、浮き輪で浮かび、石で堰をつくる。川で遊んでいる時、子どもたちの体はしゃがみこんだり、立った

り、歩いたり、泳いだり、体をひねったり、様々な動きをする。水に触れ、岩、石、砂に触れ、魚に触れ、カニに触れる。母親におんぶしてもらったり、父親に肩車してもらったりしている子もおり、人同士の肌と肌が触れ合う感覚も身体感覚として残っていくのではないだろうか。

心の中の動きとしては魚を捕まえるときの慎重さや集中や岩から飛び降りるときの緊張、一方で川にべたりと座ったり浮き輪で浮かんだりしているときの弛緩、など様々な状態がある。また、見る、見られるという関係性がある。特に飛び降りでは、飛び降りる場所をあけてたくさん大人と子どもが見ている。なかなか飛べない子を応援している子どももいる。

次に、豊田市の子育て中の母親を主対象としたメーリングリスト「ohisama ML」に呼びかけ<sup>19)</sup>、メールで回答を得たものから、上記の観察では見られなかった（表現できない）遊びについて挙げると、「ペットボトルを切って作ったしかけを、流れのある場所へしかける。」「夜に父と一緒に、うなぎの罟をしかけに行く。」というように、事前に仕掛けをする楽しみがある。また、「延々と魚を探す。9歳の兄は漁網をもって、シュノーケルで水面を泳ぎながら、ヨシノボリをみつけてはとる。弟が水槽で、水中をのぞいて魚を見つけ、兄が漁網を構えて捕まえるという分業も。」というように、兄弟で「分業」をして遊ぶということもある。

聞き取り<sup>20)</sup>においては、長時間遊んでいたことや、回を重ねるうちに分かってきたことを友達に教える様子が述べられた。

表1 川遊びの内容。

川の水や流れを利用して遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川の中に座る</li> <li>・川の中を歩く</li> <li>・泳ぐ</li> <li>・水を浴びる</li> <li>・水を掛けあう</li> <li>・浮き輪で浮く</li> <li>・浮き輪で流れる</li> <li>・浮き輪を何人かで沈める</li> <li>・岩が段状になっているところで浮き輪に乗って滑る</li> <li>・水鉄砲で水をかけあう</li> <li>・流れてきた発泡スチロールで下る</li> <li>・浮き輪や靴や人形などを上流に投げて待つ</li> <li>・大人がバケツに川の水を汲んで子どもの上方で弧を描いて撒く</li> <li>・バケツに水を入れてからバケツを逆さにして下にこぼす</li> <li>・落差の欠けた部分に座り、水を少しせき止めてからお尻を上げて水を一気に流す。</li> </ul>
生き物を対象に遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・魚釣りや魚捕り（手ですくう、タモで捕まえる、タモを下流において足で追い込むガサガサ、シュノーケリングしながら、しかけをする）</li> <li>・ザリガニやカエルやカニ、カメ捕り</li> <li>・箱メガネで川の中を見て生き物を探す</li> <li>・魚をペットボトルに入れて見る</li> <li>・川辺の虫やトカゲなど捕まえる。</li> </ul>
岩を利用して遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大岩からの飛び降り（まっすぐ飛ぶ、ひねって飛ぶ、岩に両手をついてから飛ぶ、など）</li> <li>・大人と手をつないでゆっくりと岩場を歩く</li> </ul>
石で遊ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダム（堰）をつくる</li> <li>・石並べ（四角や丸にしてジュースを入れる、など）</li> <li>・岩についた苔を石で削って削れた広さを競う</li> <li>・石を川に投げる（ただ投げる、水切り（小石を水面に投げて跳ねさせる））。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャボン玉遊び</li> <li>・ビニール製ボールでバレーボール</li> <li>・犬を連れて川に入るなど</li> </ul>



図3 川遊びの様子。

S・H氏：〇〇くんと〇〇くんでさ、2時間ぐらい、ダムづくり（笑）。すごい好きだったよね。めっちゃ寒かったよ（笑）。冷たい冷たいって言いながらずっとやってた。一略一。目標があるじゃん、ここの流れを、ここに石積んでって（流れをとめる）。とりあえずそれが終わるまでやめれん。

U・E氏：なんか生き物探検みたいなものやってもらって。みんなすごかったよ！ バケツにいっぱい。大体いるところがわかってくるよね。石をどけると必ずいるとかさ。毎年いろんな友達を連れてくんだけどみんなに教えるんだよね。ここにいるからねって（笑）

現在の子どもたちも生き生きと遊び、それを親たちは見守っていることがわかる。

## 5. 川での危険を巡って

聴き取りでも市民アンケートでも必ず挙がるのが、水難事故へのおそれである。ここで切り口を変えて、川での危険への対処についてふれたい<sup>21)</sup>。

「子どもの水辺サポートセンター」の「全国の水難事故マップ 2003-2016」<sup>22)</sup>では豊田地域に10件の事故が記されている(成人も含む)。矢作川では平戸橋付近で2件、豊田市池島町付近で3件発生しているのが目立つ。

平戸橋付近は昔も今も、地元では知られる「危ない場所」であり、人を川に引きずりこむ河童の言い伝えがある。水難事故が起きぬよう、危ないところには近づかないようにという戒めだっただろう。母親たちへの聴き取りでも次のようなやりとりがあった。「平戸橋のあたりは、ほんとに、なんかいつもね、溺れてたりして危ないから」「絶対だめだって言った。」「そこは、なんかこう……、引っ張られるらしくってー、あっははは！」「河童にね?」「へえー！」<sup>23)</sup>。言い伝えは健在である。

かつてはどのように川遊びの危険を予防していたのだろうか。そこで見えてくるのは「先輩」「上級生」の存在である。

先述したイベント「矢作川『川会議』」の翌年、第12回のディスカッションではその平戸橋付近を「あの瀬」と指しながら、69歳の男性が救助訓練のエピソードを語った。

S氏：僕らのころは、泳げないやつは先輩が指導して泳げるように順番にやっていきまして、一略一、あの瀬の下で救助訓練までさせられたんですよ。溺れた人を助けるときには、「おまえ、あそこへ行って溺れたふりしろ」、「おまえ、助けに行け」って。溺れ役の子に「そばへ近づいてきたら抱きつけ」と、こう言うわけです。溺れとる人間は藁もつかむ気持ちで抱きつくわけですね。そうすると、二人とも沈んじゃうわけですよね。両方とも泳げますから問題ないです。

けれど、次に行くやつに、「そばまで行くな、ああなるで。行ったら、飛びつかれん範囲で一逼止まれ」と。「近くへ来ればちょっと安心するで、そのすきにほつたを一発ぶん殴れ」と(笑)。「すると、一瞬ひるむ。そのときに片方の肩へ手を掛けて、ひゅっと上へ上げてやれ。

息ができるで安心する」と。それでどっちかの肩へつかまらせて近い岸の方へ流れに沿って泳いでいけと。

教えたのは高校生ぐらいの先輩だったそう(豊田市矢作川研究所, 2013)。聴き取りでも「上級生に何度も川にほかしこまれて泳げるようになった」という言葉や「先輩が全部教えてくれた」という話をよく聴く。また、先述したような親たちの見守りや、そもそも親たちが堰を作って子どもが遊べるようにしてくれた、という話もあった<sup>24)</sup>。

川に命にかかわる危険があり、それに対処せざるを得なかったことが、人と人を結びつけていたといえる。

現代は「先輩」が担っていたことを大人が担っているようだ。先述のメーリングリスト「ohisama ML」で「川遊びの危険について保護者として注意していること」を尋ねたところ、「最初に、大人が川の水の流れと深さを確認します。ここから、ここまでなら、行っても大丈夫と、子どもたちに伝えています。」「水の流れが水面からみえないフラットな部分でも、水中はすごい早い流れになっているよと、大人が子どもと一緒に体感させています。」などが挙げられた<sup>25)</sup>。

なお、豊田市では、消防署が川辺で雰囲気壊さないよう楽しげに水難事故防止を呼び掛ける「DJ レスキュー」という広報活動を2014年度から毎年夏に行っている。また、着衣泳の訓練も行われている<sup>26)</sup>。

## 6. まとめと考察

矢作川はかつて飲んでもよいような水が流れる清澄な川であり、子どもたちは存分に遊んでいた。しかし、1960年代から1970年代にかけて、汚濁により川遊びが禁じられ、1970年代後半からは、大人の、川を復活させる運動のなかで、「子どもの川遊びの復興」が目標の一つとされてきた。

現在、矢作川中流部は、川の形や生態系が高度経済成長期以前のような状態に戻っておらず、本流で川遊びをする姿はあまり見ることができない。川遊びの多くは支流や上流などで行われている。

聴き取りやアンケートからは、川遊びは大人にとって「子どもに体験させたい」ものであり、川を意識化するための結節点であり続けていることがわかった。しかし、川の危険性への恐れや川の情報の少なさ、アクセスのしにくさが川遊びの阻害要因となっている。

今後、川という自然を守りながら、「遊べる川」をつ

くり、「川遊びをする人間関係」を紡いでいくことが、川と人をつなぎ、川のある豊かな暮らしにつながっていくだろう。具体的には、川遊びの情報共有、危険回避法も含めた体験の場づくり、川へアクセスする空間の確保（川辺の保全活動の継続）、川辺を保全する団体と川遊びをしたい人々のネットワークをつくることなどが考えられる。そして、川で遊んだ子どもが大人になり、思い出を胸に保全活動をしている川辺で、その時代の子どもたちがまた遊び…と、ゆっくりと人と川とを結ぶ回路が世代を超えて伝承されれば、川辺の環境は維持続けられるだろう。

なお、これまでの川遊びを復活させる活動が関係者自身や参加者にどのような影響を及ぼしたのかについては追跡調査ができていない。今後の課題としたい。

## 謝辞

本調査にあたり、水辺愛護会会員、子育て中の女性の方々に貴重なお話を聴かせていただきました。執筆にあたっては関西学院大学古川彰氏にご指導・ご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 「子どもの遊ぶ権利宣言」IPA 1979年作成 1989年改訂。
- 2) 他、「オープンスペース」、「道」、廃材置き場や工事場などの「アナーキースペース」、秘密基地などの「アジトのスペース」「遊具スペース」がある。
- 3) 矢作川の水（2011年度までは矢作川の支流飯野川と、飯野川と矢作川の合流点の2か所も加えた3か所）を採水し、透視度計で測定をし、小学校前と市役所において結果を広報している。
- 4) 生物の多様性を豊かにすることや景観を良くすること、川へのアクセスのために空間を維持する活動（竹伐りや草刈り、ごみひろいなど）を行う地縁型ボランティア組織。
- 5) 2015年7月22日聞き取り。M・S氏。
- 6) 2015年12月26日聞き取り。M・T氏。
- 7) N氏個人蔵写真。1955年8月撮影。
- 8) 2016年7月10日聞き取り。水辺愛護会の会員ら。
- 9) 2016年3月7日聞き取り。N・Y氏。阿摺ダム付近。
- 10) 2016年7月26日聞き取り。N・K氏。
- 11) 国土交通省ウェブサイト。「矢作川水系流域及び河川の概要 4. 水害と治水事業の沿革」（「河川整備基本方針 矢作川水系」）（2017年8月閲覧）。
- 12) 2016年7月13日聞き取り。U・A氏。
- 13) 日本水大賞ウェブサイト。矢作川沿岸水質保全対策協議会事務局長内藤連三「水質浄化運動30年の闘い—矢作川で生まれた流域管理—矢作川方式—」（2017年8月閲覧）。

- 14) 2015年8月26日聞き取り。C・A氏。
- 15) 2016年8月2日聞き取り。M・Y氏。
- 16) 2015年5月21日聞き取り。母親グループ5人。
- 17) 2017年1月30日聞き取り。母親グループ4人。
- 18) 王滝渓谷…2015年8月3日,8月7日,2016年8月9日,2017年8月4日,8月12日。図は加塩川での様子も含む(2016年8月3日)。
- 19) 2015年8月7日発信。13人から回答を得た。
- 20) 2015年度～2016年度小学生程度までの子どもをもつ母親延べ16人（うち非構成的インタビュー2人）。例としてあげた会話は2015年11月22日聞き取り。
- 21) 平成28年度の全国の中中学生以下の水難者は217人（死者・行方不明者31人）。亡くなった31人の事故発生場所は半数以上が「河川」（20人,64.5%）、行為別では約半数が「水遊び」（14人・45.2%）だった。『平成28年における水難の概況』警察庁生活安全局地域課 平成29年。
- 22) 同センターが新聞記事やインターネットニュース情報から把握できた約2410件の水難事故の内容と事故発生日の位置情報（2017年8月閲覧）。
- 23) 2015年4月30日聞き取り。母親グループ4人。
- 24) 2015年10月6日聞き取り。M・T氏。
- 25) 19に同じ。
- 26) 国レベルでは、「子どもの水辺サポートセンター」が、川での体験を進めると並行して危険予防・対処への啓発を行っている。

## 引用文献

- 愛知県土木部編（1975）集中豪雨災害復興誌。災害復興協賛会発行47.7：153，愛知。
- 古川 彰（2005）環境化と流域社会の変容—愛知県矢作川の河川保全運動を事例に。林業経済研究，51 No. 1：39-49。
- 月刊矢作川同人（1977a）月刊矢作川，創刊号：2。
- 月刊矢作川同人（1977b）月刊矢作川，4：4。
- 月刊矢作川同人（1977c）月刊矢作川，4：46。
- 月刊矢作川同人（1977d）月刊矢作川，5：33。
- 月刊矢作川同人（1980）月刊矢作川，29：22。
- 月刊矢作川同人（1981）月刊矢作川，53：20。
- 月刊矢作川同人（1983）月刊矢作川，77：20。
- 月刊矢作川同人（1985）月刊矢作川，100：7。
- 長澤壮平（2015）矢作川源流の開発がもたらした河川環境への影響—愛知県豊田市旭地区周辺を対象に—。矢作川研究，19：119-129。
- 内藤連三（1987）環境と開発—矢作川方式を語る—：4。矢作川環境技術研究会，愛知。
- 小川 都（2003）矢作川とひとの暮らし 3. 川辺の暮らしと環境利用。矢作川研究，7：131-155。
- 芝村龍太（2003）矢作川とひとの暮らし 2. 矢作川の変化とアユ漁の移り変わり。矢作川研究，7：107-111。
- 仙田 満（1992），子どもと遊び。岩波新書，東京。
- 豊田市（1977），豊田市史 四巻。豊田市。
- 豊田市（2011），豊田市のあゆみ。豊田市，ぎょうせい。
- 豊田市（2016），豊田市矢作川河川環境活性化プラン，豊田市。

豊田市矢作川研究所（2012）第11回矢作川『川会議』ディスカッション「矢作川の今昔物語」．矢作川研究，16：75-85．

豊田市矢作川研究所（2013）第12回矢作川「川会議」ディスカッション「矢作川の今物語」．矢作川研究，17：165-173．

豊田市立西広瀬小学校記念誌発行実行委員会（2017）矢作川水質汚濁調査1万5千日（42年目）達成記念誌清流矢作川．

豊田市．

矢作川漁協100年史編集委員会（2003），環境漁協宣言—矢作川漁協100年史，矢作川漁業協同組合，風媒社．愛知．

豊田市矢作川研究所：  
〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館  
1F